

一般高齢者におけるライフレビューに関する研究
- 語りにおける体験過程と心理的变化に関する検討 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
栗田 祐揮

本研究では、一般高齢者を対象にライフレビュー面接を行い、そこから得られた語りを体験過程スケールを元に分析し、語りにおける実感の度合いを検討し、ライフレビュー後に感じたことや気づいたこと、気分状態などから、ライフレビューの語りにおける実感の度合いとの関係を探ることを目的とした。

調査対象者は、立命館大学高齢者プロジェクトに参加する地域在住高齢者 6 名に調査を依頼した（男性 2 名，女性 4 名，平均年齢 76.7 歳，標準偏差 3.5）。年齢範囲は 71 歳から 82 歳であった。手続きとしては、GHQ-60（中川・大坊，1985）を用いてスクリーニングを実施し、精神的健康度に問題のない高齢者を対象とした。その後、Haight（1988）の Life Review and Experiencing Form、およびそれを翻訳した野村（2009）を参考に、15 項目の質問を用いたライフレビュー面接を使用した。ライフレビュー実施後は、気分調査票（坂野・福井・熊野・堀江・川原・山本・野村・末松，1994）および、個人の内面変化を評価する尺度（野村，1998；Haight & Haight，2007 を元に筆者が作成）によりライフレビュー後の気分状態、および内面変化を尋ねた。その後、ライフレビューの面接記録を体験過程スケールの評定基準に基づき分析を行った。

その結果として、先行研究では見られない新たな知見が得られた。まず、人生のポジティブな側面に対する質問で、体験過程スケールでの評定が高い事例が 2 つあり、共通して自尊心が高まったことを報告していた。このことから、特に人生におけるポジティブな側面を、自己の内面や感じ方に焦点を当てた語り方、さらに自己吟味や仮説・問題提起などを含む語り方が、自尊心の向上につながる可能性が示唆された。さらに、4 事例においては、ネガティブなエピソードを評定値の高い語り方をしていた。個人の内面変化は、変化が見られない事例と見られた事例に分かれた。内面変化がほとんど見られなかった事例では、ネガティブな側面を尋ねてもポジティブな思考、捉え方が見られ、ライフレビューの目的である「人生の統合」が達成されている可能性が示唆された。夫婦である 2 事例については、特に人生理解やアイデンティティ形成に関わる変化を感じていたことから、ネガティブな側面を個人の内面や感じ方を中心に語ることが、人生理解やアイデンティティ形成に影響を与える可能性が示唆された。また、ライフレビューにおいて長年連れ添った夫婦で気分状態や内面変化に共通点は見られたことは、今後のライフレビュー研究において検討する余地のある点であると考えられる。一方で、本研究は 1 回のみライフレビューであること、あくまで少数事例であること、気分状態・個人の内面変化をライフレビュー実施後のみ評定を求めていること、個人の内面変化を評価する尺度の妥当性・信頼性、体験過程スケールの評定に際して課題が見られ、今後さらなる検討が必要である。